子どもの国１０周年特別号

子どもの国だより

2009年１１月発行　Vol.２１

平成２１年度　第８回通常総会

●放課後学習支援事業　「ゆめの木教室」
　小学生・中学生・高校生：月曜日～金曜日午後２時～６時

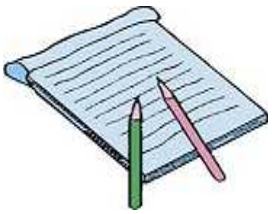
●青少年の自立支援事業　「そら」
　水曜日：午後６時３０分～８時３０分

●青少年の健全育成のための事業
　問題を抱えた子どもとその家族に対し、随時相談･援助を行う

●交流会　奇数月第３土曜日午後６時～８時

●「わくわく教室」随時（但し土日と夏休み期間）

目次



１　ごあいさつ

２　ナカヤマさん（保護者）

３　モリさん（保護者）

４　イケダマルシア先生（通訳翻訳者）

５　前田澄子先生（元スタッフ）

６　福永文子さん（フリーライター）

７　ミウラジョルジ（卒業生）

８　「ゆめの木教室」の子どもたち

９　あゆみ

10　写真

１　１０周年を迎えて

日頃はNPO法人子どもの国の活動に、ご理解とご支援を賜り、心よりお礼申し上げます。

１９９８年秋、この保見団地で不就学の子どもたちと出会い、翌年「子どもの国教育基金の会」（現ＮＰＯ法人子どもの国）を設立しました。　法人設立当時は、同じ日本社会でともに暮らしながら、基礎教育を受ける機会を失った子どもたちのため、何かお手伝いをさせていただきたいとの一念で、保見団地に通い続ける日々でした。何かができるとか、こうすれば良いというような具体的なものは全くありませんでした。ただ、皆様に支えられながら、保見団地に通い子どもたちと係り、どんなささやかなことでもやらせていただきたいとの想いで、心の中はいつもいっぱいでした。

本当に多くの皆様からお力添えをいただき、今年１０年の節目の年を迎えることができました。誠にありがとうございました。

ＮＰＯ法人子どもの国の活動をふりかえると、この１０年間で係ってきた子どもたちの数は、約１５０人になりました。

昨年秋からの「リーマン・ショック」以来、当法人登録者も影響を受け、職を失った方があります。「ゆめの木教室」の子どもたちの中には、学習に必要な原稿用紙や漢字ノートを買ってほしいと保護者に言えない子どもたちの姿がありました。また、部活動の試合に行くための交通費がない生徒も居ました。

しかし、このような状況の中でも「ゆめの木教室」登録者で、不況の影響から帰国した家族はありません。現在のところ、帰国予定者もありません。就学援助金や失業保険の受給を受けながら、夫婦どちらかがアルバイト的な仕事で生活を支えています。子どもたちも学び続けています。

活動を始めた頃、「デカセギ」という言葉がよく使われました。法人設立から３年ぐらいが過ぎ、これは「デカセギ」ではないと気づきました。今回、このような不況の中でも、

多くの方は日本に残っています。この国で生きていくことを望んでいます。子どもたちは日本国籍ではありませんが、この国で生まれ、この地域で教育を受け、この地域社会を担う構成員に成長します。

昨年の交流会（奇数月第３土曜日開催）でペルー国籍のある保護者が、「自分の息子（Ａくん１９歳）にはＮＰＯ法人子どもの国で働かせたい。このような仕事をさせたい。」と話されました。大変勇気付けられるとともに、この活動を次世代に引き継いで行く責任を強く感じています。

近い将来、この国の社会統合の現場やさまざまな分野で活躍する人材が必ず必要になります。たいへん微力ではありますが、子どもたちの将来のために、より良い活動を目指して行きます。引き続きご支援の程、よろしくお願いいたします。

ＮＰＯ法人　子どもの国　井村美穂

２　ナカヤマさん（保護者）

日本に来て１２年になります。西保見小学校には通訳の先生が見え、放課後学習支援「ゆめの木教室」では手厚い支援があります。外国籍住民へこのような充実した支援が行われている地域は保見が初めてでした。

放課後学習支援事業「ゆめの木教室」の先生方は、子どもの宿題を見てくださり、その上、家族のさまざまな心配までしてくださいます。

我が子の教育という最も大きな財産を残すための手助けをいただき、「ゆめの木教室」の皆様には心から感謝しています。

３　モリさん（保護者）

来日した当時の夢はブラジルへ帰国することで、娘,香を日本の学校に入れませんでした。しかし、時が経つにつれ、香は日本語がしゃべれないことを恥ずかしく思うようになりました。そして、自分から「西保見小学校へ通いたい。」と言ってきました。

小学一年生から入学していないため、はじめは授業に着いていけるかどうか、とても心配でしたが、「ゆめの木教室」の支援のおかげで、香は少しずつすべての遅れを取り戻すことができました。先生方の優しさのおかげで香は苦難を乗り越えることができ、夢に近づくことができました。

「ゆめの木教室」の先生方はとても優しくて、いろんなことを気遣ってくれます。子どもたちをこんなに根気強く教え、助けてくださり、心からありがたく思っています。

娘を支援して下さる感謝を、どのように表現すれば良いのかわかりませんが、いつまでも、永久にということは確かです。

４　イケダマルシア先生（通訳・翻訳者）

ゆめの木教室に通って

「ゆめの木教室」に通い始めたのは５年前のことです。当時は、週３回程度、１時間、顔を出していましたが、現在は、金曜日のみ参加し、主にポルトガル語の通訳・翻訳をしています。「ゆめの木」に通っている子どもたちは素直で、どの子もかわいいです。それは、スタッフの方々の想いが届き、初めは心を閉ざしていた子も、自然に明るくなるからだと思います。子どもたちの両親は共働きで、なかには母子家庭父子家庭もあります。朝から晩まで重労働で、子どもたちに接する時間は非常に短く、日本の学校の宿題をみる言語力もありません。そんな外国人の子どもたちを「ゆめの木」はあたたかく見守っています。子どもたちに直接教えるだけでなく、日本の文化・習慣、進路に役立つ情報を保護者に提

供する交流会も素晴らしい活動だと思います。
　現在の経済不況が訪れた際、直ちに外国人の就労状況を把握するためアンケートをとり、様々なかたちで援助をしています。私も外国人であり、日本の学校に通っている子どもがいます。個人的にもスタッフの皆さんに貴重なアドバイスを頂いています。保護者の方々にとっては、言葉では表すことができないほどありがたいことだと思います。外国人でありながら仲間のために子どもの国のスタッフの皆さんのようなことはできず、頼りにならない私ですが、今後とも子どもたちの夢の実現に向けてお手伝いをさせて下さい。ＮＰＯ法人子どもの国１０周年、おめでとうございます。スタッフの皆さん、お体を大切に、これからも末永く活動をお続けになることを願っています。

５　前田澄子先生
ＮＰＯ法人子どもの国の活動に関わって
（　放課後学習支援事業「ゆめの木教室」・青少年自立支援事業「そら」　）
　私は、大学３年生を終えてから、ブラジルに留学した。「おはよう」「こんにちは」程度のポルトガル語しか話せなかったが、思い切って旅立った。案の定、言葉、考え方、社会通念の違いでトラブル続きの日々。一年間、滑稽たるあり様だった。しかし、ブラジルの人々は、極東からやって来た外国人を快く受け入れ、当然のこととして支えてくれた。お金に困ったとき、住むところに困ったとき、淋しくて苦しかったとき。いつもわたしの周りには、力を貸してくれた人々がいた。
　帰国してから、「ブラジルの人々への感謝の気持ちを忘れてはいけない」と思い立ち、「ゆめの木教室」に通った。しかし、そこで目にしたのは、ブラジルで出会った底抜けの笑顔を見せる人々ではなかった。学校でいじめられる子ども。勉強についていけずに学校をやめる子ども。日本の地に足をつけきれない不安から非行に走る青年。いつかブラジルに帰りたいと願いながら労働に甘んじる人。
　ブラジルという国は、階級社会で人種が雑多。貧富の差も激しい。しかし、そんな社会であるだけに、多種多様な人が背中合わせに生きていることを肌で感じられる。温かく、大らかで情け深い面を持った社会だ。ブラジルの人々の裏表のない態度。見返りを求めない無邪気なまでの優しさ、寛容さ、そして勤勉さ。「ゆめの木教室」や「そら」の活動では、こうした人々がぬかるみの中を苦しんでいる姿を目の当たりにした。
　当時の私は「誰がどのようにブラジルの人々を変えたのだろう。」と考えに考えた。最後まで答えは見つからなかったが、苦闘する彼らから学ぶことは多くあり、それが今の私につながった。ブラジルや「ゆめの木教室」、「そら」の活動は、私の原点となり、それからの心の拠り所となった。今でも、出会った人々や子どもたちが語ったことが忘れられない。

６　福永文子さん（フリーライター）
子どもの国 10 周年に寄せて
～子どもたちの‘夢’を支え続けるために～
　NPO 法人子どもの国の皆様、活動 10 周年、おめでとうございます。
10 年と一口に言いますが、これまでの日々は、理事長・井村さんはじめ、スタッフの皆さん、子どもたち、保護者の皆さん、そしてこの地域に暮らす様々の人々の熱意と、地に足がしっかりついた確かで実のある取り組みの軌跡に他ならない、と思います。まずは、お祝申し上げます。
　私と子どもの国との出会いは、今から 10 年前のある秋、まだ「子どもの国教育基金の会」という名称だった時期に遡ります。日本語ボランティアを経て、日本語を母語としない子どもたちについて考え始めた私は、「学習支援について知りたいのならば、ぜひ、話を聞い

た方がいい」という保見ケ丘国際交流センターの楓原さんの言葉で、井村さんのことを知りました。そして訪れた集会室。これから教室の準備を始めようと、机や椅子をガタガタと動かしながら忙しそうに働く井村さんが、こちらの突然の訪問にも関わらず、にこやかに言葉をかけてくださったのを、昨日のことのように覚えています。

教室は、子どもたちとスタッフの皆さんが常に格闘し合う中、混沌としつつ、ある種の熱気を帯び、不思議で魅力的なエネルギーに満ち溢れていました。集会所の和室で押入れに入りこんで隠れんぼする子。配ったおやつをひっくり返す子…。教室を飛び出してしまう子…。子どもたちは自らの重しを取り除くかのように、エネルギーを発散させています。そんな子どもたちを相手に、スタッフの皆さんは時には喝を入れ、時には知恵を絞り、そして時には子どもの心に寄り添いながら、何とか学習支援の形を構築していこうと、あの手この手を尽くしておられました。活動は当初、行きつ戻りつし、平坦なものでは決してなかったと思います。しかし、皆さんの真摯な姿と、それに応えようとしていく子どもたちの姿を見ながら、私は「保見というこの場所で、この社会を変えていく、地殻変動が起きている！」という思いに囚われ、その様子をぜひ綴りたいと、ほぼ毎週、訪問させていただくようになりました。

人はどんな状況に置かれても、夢や希望を持っていれば、生き続けることができると思います。逆に夢や希望への道が閉じられてしまえば、生きる意味を見失うことすら、あります。ところが人が夢や希望を持ち続けるには、周囲の様々な支えと、それを実現できる土壌が必要になります。『反貧困』を書いた湯浅誠さんは、人々の暮らしを支え、意味ある生存を保障するための要素を「溜め」という言葉で表しました。学ぶ力、学び続ける力は、複雑で激しい現代を生きる上での「溜め」であり、この「溜め」こそが、子どもたちが夢や希望を持って生き続けていく上での大きな前提であり、不可欠な要素です。

子どもの国の皆さんの実践は、まさに子どもたちの「溜め」を豊かにする試みだと思うのです。

今年 3 月、かつてゆめの木教室をにぎわせていた子どもの一人が、真新しい制服を着て、教室に来ていました。「高校を無事、卒業して、就職した。正社員になったよ！」「仕事もどんどん覚えて、先輩や仲間とも仲良くしていくんだ！」。彼の言葉は力強く、その姿は実にまぶしいものでした。そしてここに、ゆめの木教室 10 年が結実したように思われました。

彼に続く後輩たちが今、教室に大勢、通っています。どうぞ、今後も子どもたちの夢を支え続けてください。そしてこの社会を、多様性に富み、豊かで深みのある世の中に変え続けてください。

７　ゆめの木教室　卒業生（ミウラジョルジ君　19 歳　ペルー国籍）

日本に来たのは、５歳で「ゆめの木」を知ったのは１０歳くらいです。最初は日本語が全然わからなくて困っていた時、「ゆめの木」に出会い、わかりやすく教えてもらいました。

中学校から高校に入るとき、僕は自分の力で高校に入りたくて、毎日、自分で勉強しました。でも、どうしてもわからない時は、井村さんに「いつでも聞きにおいで」と言われていたから、その時は「ゆめの木」へ行きました。そのおかげでなんとか高校に入学することができました。ゆめの木の先生に「わからないことは聞きにおいで」と、しつこく言われていなかったら、高校に入るのも難しかったと自分でも思います。

高校に入ってからは、部活などで忙しくて、なかなか来れないときもあったけれど、ときどきゆめの木に来ていました。高校を卒業し、この春から、Ｍ工業で正社員として働いています。上司の方から仕事を教えてもらい、残業も多いけれど、会社の人から頼りにされ、とてもやりがいを感じています。

８　ゆめの木教室の子どもたち

今、ゆめの木教室に通っている子どもたちに聴いてみました。（一部抜粋）

① ゆめの木教室で一番楽しかったこと
② ゆめの木教室で学んだこと、勉強したこと
③ これからかんばりたいこと
④ スタッフのみなさんへ一言

小学３年Ｓさん
① 友だちができたこと
② 漢字、計算、トイレ掃除
③ みんなとお友だちになりたい。
④ これからも、どうぞ、よろしくお願いします。

小学２年Ｍさん
① 勉強が終わってから友だちと遊んだこと
② 机の上にすわらないこと
③ 漢字
④ スタッフＥさん「ありがとう」

小学４年Ｂさん
① みんなと触れ合えたこと
② トイレ掃除とスリッパを揃えること
③ みんなに優しくする。きれいな字で書く。
④ ゆめの木教室の子どもたちを支えてくれて、ありがとうございます。

９　あゆみ

1998 年(H10)　○保見団地内で遊ぶ不就学の子どもたちと出会い、家庭訪問を始める。

○帰国予定のＡさんに母語の教室を開く。

1999 年(H11)　○民間ボランティア団体「子どもの国教育基金の会」を設立。

2000 年(H12)　○「子どもの教育について考える会」を毎月１回のペースで始める。
(現在の交流会)

○日本の小学校に入学予定で、日本語が話せない子に出会い、入学前日本語教室を開く。(2000 年 2 月～2000 年 3 月)

○保見団地に住む日系ブラジル人のお母さんから、学校の宿題を教えてもらいたいとの声があり、放課後学習支援事業「ゆめの木教室」を始める。(2000 年 4 月～現在)

2001 年(H13)　○特定非営利活動法人　認証

2002 年(H14)　○放課後学習支援事業「ゆめの木教室」が、豊田市より事業委託され、現在に至る。

○文化庁委嘱協力事業「親子参加型日本語教室」実施の協力を行う。
(2002 年 11 月～2005 年 3 月)

2003 年(H15)　○独立行政法人福祉医療機構　助成事業「特別分」実施。
(2003 年 4 月～2004 年 3 月)

2004 年(H16)　○青少年自立支援事業「そら」豊田市より事業委託され、現在に至る。
○公立小中学校と定期的に情報交換・相談ができるようになる。

2006 年(H18)　○提案と実施協力
① 不就学調査
② 豊田市外国籍児童生徒受け入れマニュアル作成（指導者用）

○事務局メンバーを中心に、「ゆめの木漢字検定」を作り始める。

○交流会で進路説明会を始める。

2008 年(H20)　○キワニス文庫賞　　（名古屋キワニスクラブ）
○愛知県国際交流推進功労者賞　　（財団法人愛知県国際交流協会）